
遊戯王 アルカナソウル

キャベツ王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 アルカナソウル

【Nコード】

N8006Y

【作者名】

キャベツ王子

【あらすじ】

普通のアカデミア受験生鳴上 総司。だがアカデミアの試験に行く途中で奇妙な夢を見てしまい…。アカデミアで新たな出会い、さまざまな出来事が彼を成長させていく、そんな物語。

試験というのは遅れると基本不利

「眠い…」

俺の名前は鳴上総司。デュエルアカデミアの受験生だ。デュエルアカデミアと言うのはプロデュエリストを養成する所だ。

で、今日はそのデュエルアカデミアの試験、電車に乗って試験場へと向かっている途中。

昨日遅くまでデッキ調性をしていたためか凄い眠い、このままオリンピックの日まで眠りたい、そんな気分だ。

「駅まで…あと…10分…寝るな俺……でも5分ぐらいなら…zzz」

俺の意識は暗闇へと落ちた。

- - - - -

「お待ちしておりました」

「…Why?」

目の前にはゴスロリ服をきた俺と同じぐらいの年頃の少女がいた。

問題は今いる場所だ。ゴスロリ服が似合わない和室…しかも戦国時代の武将が座っていそうな広い部屋だ。

もしかしてあれか？電車の中で寝ていた俺を誘拐したのか？それだと俺やばくないか？

…それはないか。

「ご心配召されずに。現実のあなたは眠っているだけ、ここは夢の世界だとお考えて下さい」

「・・・」

…頭が痛くなってきた。

「失礼。自己紹介が遅れました。私、^{わたくし}キャサリンと申します。以後お見知りおきを。

「はあ…俺は鳴上総司です…」

キャサリンが丁寧に喋るので、つられて俺も丁寧になっちゃおう。

「突然お呼び立てして申し訳ありません。実はあなたに話しておかないといけない話がありますので」

「話って？」

「あなたにある力の素質があるのです。ですが、あくまで素質、その力に目覚めるかどうかはあなた次第。私はその力を持つ者を導くのが私の役目で御座います」

力…？素質…？まるで意味がわからんぞ！

「今は分からなくて結構。しかし、ここでは何でも調べる事が出来ますので、調べ物が出来ましたらこの鍵を使い、ここにいらっしゃって下さいませ。私が力になりましょう」

「それではごきげんよう」といいキヤサリンは指パッチンをする。すると俺の意識がうつすらと消えていく

- - - - -

「…ん…」

目が冷めると電車の中、椅子に座っていた。

それにしても…なんだ今の夢…？ホント疲れてんかな…？ま、たちの悪い夢だと思って忘れるか…

…そう言えば今どこの…え…き

「…！？」

まずい…電車降りる駅通りこしているだと…！？

「やばいつて！」

不幸中の幸いか、電車は駅で止まっていた。降りて電車に乗れば間に合うか？

考える前に全速力で電車を降りていた。

- - - - -

「ぜえ…ぜえ…」

ぎりぎり…か？

「90番！鳴上総司！いないのか！？」

「はいはい！！います！今行きますから！ぜえぜえ…」

くそッ…今日は災難だな…そう言えば…必勝祈願で行った神社でおみくじ日居たら大凶だったけ？

「ダメだ！ダメだ！そんなん考えてたらホントに落ちるって！」

ダメだ…疲れて上手く頭が上手く回らない…。おかげで変な目で見られてるよ…

「おい、大丈夫か？」

「あ？」

凜とした声の主は赤い髪のポニーテールの女性だった。

「酷く疲れているようだが…」

「大丈夫、大丈夫！でも、心配してくれてありがとう。じゃ！急いでるから！」

俺は今日行われる実技試験の会場へと走った。

「待たせたねお姉ちゃん」

「別に待っていない。試験はどうだった？」

「…あんなのただのザコキャラよ。」

「そうか、じゃあそろそろ行こうか」

二人の姉妹は総司が走った逆の方へ歩き出した。

- - - - -

「遅いのーネ！」

「ぜえ…ぜえ…すみません！」

会場にいたのは黄色いおかつぱだった。

「ペナルティとしてデュエルアカデミア実技最高責任者である私が相手をするノーネ！」

「まじっすか…ぜえ…ぜえ…」

ダメだ…今日は本当にダメな日だ、人生で二、三番目に不幸な日だ…

「さっさと用意するノーネ！」

「ぜえ…ぜえ…こうなりややけだ！」

俺は素早くデュエルディスクを装着する。昨日徹夜してまで改良したデッキをデュエルディスクに入れる。

「デュエル!!」

総司LP4000

おかつぱLP4000

「先行は譲ってやるのーネ！」

「あざっす！俺のターン！」

手札は…上々、まだましな手札だ。

「【磨破羅魏】を召喚！このモンスターの効果は次の俺のドローフエイズにデッキトップを確認し、デッキの一番上か下におく事が出来る！」

【磨破羅魏】

ATK1200

「俺はこれでターンエンド。そして【磨破羅魏】はスピリットモンスター。自身の効果により手札に戻る。さあ、どこからでもどうぞ！」

「フィールドをがら空にするなんてなめてのですーカ！？私のターン！フィールド魔法【歯車街】を発動を発動するノーネ！更に力

ードを二枚伏せ、【大嵐】を発動するノーネ！」

二枚の伏せカードと歯車だらけの街が嵐によって破壊される。

凄く嫌な予感しかない…

「破壊された【歯車街】と伏せカード二枚の【黄金の邪神像】の効果を発動スルーの！まずは【歯車街】の効果により、デッキから【古代の機械巨竜】を特殊召喚するノーネ！次にセットされていた【黄金の邪神像】破壊された事で【邪神トークン】を特殊召喚するノーネ！」

【古代の機械巨竜】

ATK3000

【邪神トークン】×2

ATK1000

「まだまだですーノー！二体の【邪神トークン】を生贄に捧げ、来るノーネ！【古代の機械巨人】！」

【古代の機械巨人】

ATK3000

攻撃力3000のモンスターが二体…流石に実技の最高責任者って事はあるな…。この絶望的な状況から観客席からは「終わったな」と思っている人がある顔をしている人がほとんどだ。

「これで終わりノーネ！二体のモンスターでダイレクトアタックするノーネ！」

まずは【古代の機械巨人】が俺に殴りかかってきたが、その攻撃は鐘を持った悪魔のようなモンスターに防がれる。

「何なのーネ！？」

「相手からの直接攻撃を受けた事により、手札から【バトルフェーダー】の効果が発動！バトルフェイズを終了させ、このカードを特殊召喚！」

【バトルフェーダー】
DEF0

「焦っちゃだめですよ先生」

「ぐぬぬ…、ターンエンドナノーネ！」

「俺のターン！【摩破羅魏】の効果により、デッキトップを確認する」

デッキトップのカードは【聖なるバリア・ミラーフォース】…。アンテーク・ギアシリーズにはほとんどの攻撃反応型のトラップには効かない…よって今の状況では無意味のカード…

「俺は確認したカードをデッキの一番下に置く。そしてドロー…！フツ…」

悪いなおかつば先生…俺の勝ちだ…！

「【バトルフェーダー】を生贄に捧げ、【砂塵の悪霊】を召喚！こ

いつは召喚成功時、フィールドに存在するこのカード以外の表側表示モンスターをすべて破壊する！サンド・ストーム！」

【砂塵の悪霊】が砂嵐を起こし、おかっぱ先生の二体の機械族モンスターは砂まみれになり、機能停止する。

「なななんですーと！？」

「手札のスピリットモンスター【伊弉波】を除外し、手札から【伊弉風】を特殊召喚！」

【砂塵の悪霊】

ATK2200

【伊弉風】

ATK2200

「バトル！【砂塵の悪霊】でダイレクトアタック！更に【伊弉風】もダイレクトアタック！ブレイブ・ザッパー！」

「ペペロンチいノおおー！」

おかっぱ

LP4000↓1800↓0

「試験の結果は後日通達するノーネ……」

「はいですーの……じゃなくて、了解です！ありがとうございます！」

ふう…緊張したな…実技の最高責任者ッていうぐらいだから負けるかと思っただけ、なんとか勝てた。受験生だから手を抜いてくれたのか？

「よ！お疲れさん！」

「悠か、ありがとうさん」

有里 悠。俺の昔からよくつるんでる奴だ。どんな奴かって聞かれると、友達思いな奴だな。

「…？今日は愛華と一緒にじゃないのか？」

「用事があるから試験が終わってすぐ帰った。なんの用事かは聞いてないけどな」

愛華というのは悠と同じ孤児院で暮らしてる女の子だ。ついでに言う悠の恋人だ。「爆発しろ」

「なんか言ったか？」

「別に。誰も爆発しろとは言ってませんが」

「敬語になってんぞ！それに爆発しろってなんだ！？」

「そんなのはどうでもいいから腹減った。マック行くぞ」

「無視すんなあああ！」

マックへ向かう途中俺と同じ様に遅刻したのか走っている奴がいたけど、そいつの話はまた別のお話…。

試験というのは遅れると基本不利（後書き）

今回の最強カード

伊弉冉イザナギ / Izanagi

†

効果モンスター

星6 / 風属性 / 天使族 / 攻2200 / 守1000

このカードは手札のスピリットモンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するスピリットモンスターはエンドフェイズ時に手札に戻る効果を発動しなくてもよい。

総司「スピリットモンスター関連で優一特殊召喚が出来るモンスターだ。【雷帝神】が倒せない【サイバー・ドラゴン】を倒せるといいう中々使えるモンスターで、スピリットモンスターを維持出来る効果を持つ。ちなみに俺のフェイバリットカードだ」

主人公と注意

鳴神 総司

年齢… 15歳

性別… 男

身長… 170cm

使用デッキ『スピリット』

見た目は… ペルソナ4の主人公だと思って下さい。

どこにでもいる一般のアカデミアの受験生… のはずだが試験会場へ向かう途中、謎の夢を見る事になる。その夢の内容を要約すると、総司には力の素質があるとかそんな感じ。とある友人にだけはDSになる。

両親は事故で無くしており、今は叔父の家で生活している。

注意をいくつか。

- 1、オリキャラ&オリカ多数ですご注意下さい。
- 2、ある一人のTFキャラの設定をストーリーの展開上、大きく変更しております。
- 3、作者は文才ナッシングです。
- 4、不定期更新（出来れば更新する日を決めて行く予定）

以上の事が苦手な方は読む事をやめる事をお勧めしません。慣れて下さい。

悪いな、絶賛生中継中だ（前書き）

注意！

今回、初手エグゾ5枚より酷いチートドロがありますのでご注意ください

悪いな、絶賛生中継中だ

「おら！とつととカードよこせ！」

どうも、鳴上 総司です。えゝ今俺達はチンピラ二人に絡まれてます。理由はいたって簡単。かつあげされてる子供を助けようとしたからです。んで、子供たちはなんとか逃がすのに成功して、で現在。

「いやゝ子供にかつあげってアンタら酷いっすねゝ」

何を思ったか悠が不良相手に挑発を شدした。やれやれ…めんどくさい事になりそうだ…

「あ？俺らはただ、カードを交換しようとしただけだぜ！この【ワイト】とな！」

【ワイト】…アンデッド族最弱のモンスターだが使い方によっては強くなるんだぞ？これは…ザコだな、こいつら。

「それを邪魔してくれよゝ交換出来なかったじゃねえか！」

「いやいや…【ワイト】と交換するカードって…まあ…あるか？」

「使いこなせば結構強いらしいけどな」

【ワイト】が強いかどうか悩んでいる悠に軽く説明した。まあ、実際【ワイトキング】っていう切り札があるんだけどね。

「つーかおたくら、子供にしか交換する相手がないなんて同年代の友達いなのか？」

「おい、悠！それがもし本当だったら失礼だろ！すみません…こいつ礼儀知らずなもんで…。友達はいるけどあれですよ？あなた達が弱いから交換してくれる相手がいないだけですよね？」
おつとと…口が滑ったか？

「何だと…」

「お前ら！本当の事言っな！兄貴が悲しむだろ！」

「おい！」

おいおい凶星かよ…

「ぶっ！凶星かよ！…くくく…ダメだ…ツボった…！」

次の瞬間悠が壊れたかのように笑い出す。するとどうだろう…弱い兄貴のほうの顔が赤くなっていく…

「う、うるせえ！こうなったらデュエルしろお前ら！俺が強い事を証明してやる！」

「もし俺らが勝ったらお前らのデッキと金を懸けて勝負だ！」

「いいね。んじゃタッグデュエルな。ハンデとしてお前らのLPは4000、俺らはLP500でいい」

「なめてんのか！？」

いやいや…弱いって言ったのあなたの子分でしょうが…

「ま、その代わり、先行は貰う。おい悠、デュエルの時間だ」

「くく…え？デュエル？しちゃう？言っとくけど、俺らは強いよ？」

「問答無用だ！行くぜ！」

「「デュエル！！」」

「完全に頭に血がのぼっちまってるな…。悠、お前が一番目な。」

「了解つと！準備完了だ！」

「「デュエル！」」

悠&総司LP500

不良グループLP4000

注意、タッグフォースルールです

「行くぜ！俺のターン！おっと…良い手札だな…。俺は【E・HEROプリズマー】を召喚！」

全身が水晶のようなヒーローが現れる。

【E・HEROプリズマー】

ATK1600

「プリズマーの効果を使うぜ！こいつは融合デッキに存在する融合モンスターを選択し、その素材モンスターをデッキから墓地に送る事でエンドフェイズまで、プリズマーはそのモンスターと同じ名前

になる。俺が選択するのは【メテオ・ブラック・ドラゴン】を選択し、素材モンスターは【深紅眼の黒竜】を選択！」

【E・HEROプリズマー】

ATK1600

「馬鹿な！？レッドアイズだと！？」

「あの超レアカードが何故！？」

え？何故孤児院の子供がこんなレアカード持てるかって？まあ、簡潔に説明すると、悠がとあるギャンブラーにデュエルに勝って、あのカードと、孤児院に金を寄付させたんだ。

「お次に魔法カード【黒煙弾】を発動！【深紅眼の黒竜】が自分の場にいる時、相手に【深紅眼の黒竜】の元々のダメージを与える。よって、レッドアイズをコピーしているプリズマーの元々の攻撃力1600Pのダメージを与える！」

「な！？ぐう…」

不良コンビ

LP4000↓2400

「カードを3枚伏せ、ターンエンド！さあ弱い兄貴さん、アンタの番だぜ！」

「うるせえ！俺のターン！ふふ…良い手札だ…！」

何か良いカードを引いたみたいだな…どこまで足掻いてくれるか…

「【古のルール】を発動！手札からレベル5以上の通常モンスター

を特殊召喚する！こい！【スパイラルドラゴン！】

ドラゴンと書かれているが海竜族だという可哀相な子が現れた。

【スパイラルドラゴン】

ATK2900

「ほーいきなり攻撃力2900とはーすごいなー」

「うん、そうだねー勝てる気がしなーい」

「驚くのはまだただだぜ！もう一枚【古のルール】を発動！こい！

【スパイラルドラゴン】！」

…またかよ

【スパイラルドラゴン】

ATK2900

「まだまだあ！【古のルール】を発動！来な！【スパイラルドラゴン】！」

【スパイラルドラゴン】

ATK2900

「どんな手札だよ！？初手の手札で同名カードが3枚揃って！？しかも2グループだし！」

「これは…なんとなく弱いつていう理由が分かったわ…」

「決めてやる！一体目の【スパイラルドラゴン】で貴様のザコモン

スターに攻撃だ！」

「トラップ発動！【マジカルシルクハット】！デッキから魔法が罠をフィールドに二枚を表側モンスター一体と合わせてセットする！さあ、どれを選択する？」

「真ん中だ！いけえ！【スパイラルドラゴン】！」

【スパイラルドラゴン】が巻き起こした渦潮に一つのシルクハットが破壊される

「ふふ…ビンゴだ。破壊されたのはプリズマーだ」

「ふん！どの道全部破壊するだけだ！残りのシルクハットも攻撃い！」

「おっと…あとの奴は通せねえな。【攻撃の無力化】だ！」

二体の【スパイラルドラゴン】の攻撃をバリアを防ぐ。

「はあ？お前馬鹿じゃねえか？」

「それはな、最初の攻撃で使うのが普通だろうが！このど素人が！素人はお前らだよ。一見無駄に見える行為だが、決して無駄じゃない。

「これで俺はターンエンドだ！」

「エンドフェイズに俺の残りのシルクハットが破壊される。だが、破壊されたのは二枚とも【黄金の邪神像】だ！セットされているこ

のカードが破壊された時、【邪神トークン】を特殊召喚する！」

【邪神トークン】×2

DEF1000

ちなみにこのコンボ、セットされている【黄金の邪神像】攻撃対象になれば、表側表示になってしまい、効果が発動しない

「ふん！そんなザコモンスターを召喚してなんになる？」

「こうなるんだよ。俺のターン！二体の【邪神トークン】を生贄に捧げ、【火之迦具土】を召喚！」

頭が燃えている熱いモンスターが現れる。

【火之迦具土】

ATK2800

「更に【二重召喚】を発動！このターンもう一度通常召喚を行う！来い！【摩破羅魏】！」

【摩破羅魏】

ATK1200

「そんなザコばかり並べて、どうなるんだよ！」

「だからこうなるんだってば…。【死のマジックボックス】を発動！お前の場の【スパイラルドラゴン】を破壊し、俺の場の【摩破羅魏】をお前の場にコントロールを入れ替える！」

「あ！俺の【スパイラルドラゴン】がッ！」

いやいや…まだ二体いますやん…

「更にフィールド魔法【バーニング・ブラッド】を発動！全ての炎属性モンスターの攻撃力を500上げ、守備力を400下げる」

【火之迦具土】

ATK2800 ↓ 3300

「攻撃力を上回っただと!？」

「バトル！【火之迦具土】で【スパイラルドラゴン】に攻撃！紅蓮滅殺拳！」

不良グル・プ

LP2400 ↓ 2000

「メインフェイズ2に移行し、悠が伏せていたトラップ【亜空間物質転送装置】を発動！【火之迦具土】をエンドフェイズまで除外する！」

妙な機械に【火之迦具土】は何処かへ転送させられた。

「カードを一枚伏せ、エンドフェイズ。お前の場にいる【摩破羅魏】はスピリットモンスター。よって俺の手札に戻る」

「何だと！」

「そしてもう一つエンドフェイズに【火之迦具土】は戻ってくる！」

「だがそいつもスピリットモンスターだろ！？早く手札に戻せ！」

「【亜空間物質転送装置】はあくまで場に戻す効果。スピリットは召喚したターンのエンドフェイズに手札に戻る」

つか初めにスピリットは特殊召喚出来ないから【ア空間物質転送装置】で戻すの無理じゃね？っていう疑問が浮かぶだろ？

「くそ…なめやがって…。俺のターンだ！」

「おっとその前に【火之迦具土】の効果で手札をすべて捨ててもらおうか」

「な…んだと」

哀れ子分…手札一枚でどう来る？

「【スパイラルドラゴン】を守備表示にしてターンエンド…」

何か子分が可哀相になってきた。

「俺のターン！確か…前のターンで総司が【摩破羅魏】出したから効果使えたんだよな…確認して…ブッ！…一番上に置く…」

いきなり吹き出す悠。よほど面白いカードを引いたと見た。

「くく…【死者蘇生】をはつど…プ…【スパイラルドラゴン】を蘇生…はっはは…！」

【スパイラルドラゴン】

ATK2900

「……」

何か不良グループがすっごい絶望した顔してるんだが。

「バトル…っく…【火之迦具土】で守備表示の【スパイラルドラゴン】を攻撃！」

必死に我慢しているな。笑いだすのを。

「これで…とど…プふッ…【スパイラルドラゴン】でダイレクトアタック…く…ははっはっははっはっは！」

「ちくしょうがあああああ！！！」

不良グループ

LP2000↓0

「ちくしょう！覚えてろ！」

デュエルに負けた途端全力疾走で逃げ出す不良グループ。腹を抱えて笑いだす悠。

「余計に腹減った…。笑ってないでさっさと行くぞ」

悠を無視して俺は歩き出した。

- - - - -

「なあ、知ってるか？」

マックでハンバーガを頬張っていると悠が話題を振ってきた。

「女優の藤原 雪乃がアカデミアに編入するってニュース…」

「藤原 雪乃って今バカ売れしてる？。ってか、女優からデュエリストってどんな波乱万丈だよ…」

女優、藤原 雪乃。まだ俺達と同じ15歳に関わらず女優。しかもその演技力は大人顔負けだ。更に言えば、一部の男どもからは絶大な人気を得ている。

「ゆきのんと一緒に授業受けるかもだぜ？楽しみだよな。だってよくあのゆきのんだぜ？愛華と同じ年でアの身体だぜ？」

ゆきのんって何だゆきのんって…こいつはあれか？藤原雪乃の熱狂的なファンか？

「その言葉、愛華に報告してやろうか？悲しむだろうな。あんな告白までしておいて結局は有名人をとるなんてな。同じ男だけど、軽蔑するね。一応聞くけど、そのゆきのんのどこが好きなんだ？」

「そりゃあれだよ前！あの豊富な胸！あれは最高だね！あとは脚のラインかな！あとはあの色っぽい声！あれでイケるかもだわ。それから…」

前回、こいつの性格を友達思いと説明したが訂正する。こいつは真正銘の変態だ。超がつくほどの…。

だが悠よ。残念だがお前の変態を直すためにある人物を呼ばせても

らおっ…

〈5分後〉

「…どうだ！これが藤原雪乃の魅力だ！」

そう言っただけはジュースを飲み干す。だが悠が長く語ってくれたおかげで準備が整ったようだ。

「ゆきのんの魅力は十分分かった。お前はあれかゆきのんのような胸を持っている女性が良いのか？」

「まあな！愛華もまあ…あれだけど、きっと大きくなるはずだって！」

「そうかそうか…。という事らしいです。愛華さん」

「へ？あ…い…か？」

俺は悠の後ろに立っている愛華にそう言っただけで、つられて悠も後ろを見る。するとなんという事でしょう！悠の顔がドンドン青ざめて行きます。

「そうですか…。大きい方が良いですか…。すみませんねーこんなまな板でー」

そう、この喋りかたの女の子が悠の恋人、山岸 愛華だ。特徴と言えば、銀色の長い髪だろう。んで、今はかなりお怒りの様子だ。何でそう思ったかって？黒いオーラが見えるからさ！

「愛華！？何でここに！？」

「すまないな悠。絶賛生中継中だ」

そう言つて俺は通話状態のケータイを見せる。相手は勿論愛華だ。

「にしても早かったな愛華。用事があつたんじゃないのか？」

「偶然近くを通りかかっただけです。それより、ご連絡有難う御座いました。」

「気にするな。それより、悠はお前と藤原 雪乃についてお話がしたいらしいんだ」

「奇遇ですね、悠。私もあなたと話したい事が山ほどありますのでー。そうだ！悠！これから出かけましょう！二人で！」

「ふ、二人！？で、でも総司がかわいそう…」

「気にするなつて悠。俺のなんかより、彼女の事を大切にしてやれ」

でも…もしかしたらここで別れたら悠と二度と会えないかもしれない…そう考えると何でだろう…胸が苦しくなる…。

「ハンバーガーが美味しい…」

「おい！何悲しそうな顔して俺のハンバーガー食つてやがる！」

「え？だって二人で出掛けるんだろう？愛華は今すぐにでも出掛けたい顔してるし、でもお前が行ったらハンバーガーが勿体ないだろ

う？」

「流石総司君！友人の事をこんなに大切してるなんて！」

「どこが大切してんだよ！どこもしてねーだろうが！！」

「悠よ…ハンバーガーの事は気にするな…俺が責任を持って食いきつてやる…だからお前は…愛華と一緒に…行くんだ！」

「総司君！！！」

「何『俺が盾になるから先にいけえ！』みたいな雰囲気出してんだよ！俺は嫌だだからな！絶対嫌だからな！」

悠め…そんな大声出さないでくれ…子供が「ママーあのお兄ちゃん、大声で嫌だ嫌だって言うてるよー」と母親に言つと「シッ！見ちゃいけません」と言われる始末だ。

「じゃ行きましょうか」

「助けてくれ！総司！お前が招いた種だろう！」

「…そつとしておこつ」

「そつとしないでいいから助けてえええええ！」

「そんな大声を出して恥ずかしい…さっさと行きますよ！」

愛華が悠を睨みつけると、悠は大声を出すのをやめた。あれだなー悠は嫁に逆らえない夫になるだろうなー

「それでは総司君！ご迷惑をおかけしました！」

「んー気にするな。じゃ二人でごゆっくり」

「つく…総司…」

何か悠が言いたそうな顔をしているが、俺は無視した。二人は店を出て行った。

「…ハンバーガー美味いな…」

悪いな、絶賛生中継中だ（後書き）

今回の最強カード

「火之迦具土^{ヒノカグツチ} / H i n o - K a g u - T s u c h i」†
スピリットモンスター

星8 / 炎属性 / 炎族 / 攻2800 / 守2900

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時に発動する。

次のターンのドローフェイズのドロー前に相手は手札を全て捨てる。

総司「今回はこのハンデスなら最強の効果を持つモンスターだ。その代わりスピリットモンスターだからな折角苦労して出してもエンドフェイズに手札に戻ってしまう。工夫をして使おう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8006y/>

遊戯王 アルカナソウル

2011年11月25日23時00分発行